平成29年1月1日発行（毎月一回1日発行）第71巻第1号　昭和22年4月28日第三種郵便物認可　ISSN0385-826X

児童心理

1
2017
No.1034

[Child Study] 子どもの心を育む教師と親のために

特集

前向きな子

- 前向きに生きる
- ポジティブ心理学から見た前向きな心
- 励まし、勇気づけを有効に使う
- 友だち関係に傷つき、思い悩んでいる子に
- ネガティブ思考がよい結果を生むとき

新連載

子どものLGBTについての理解と関わり

石丸径一郎

連載

学校外の子どもの今

〈プレーパークの子どもたち〉小川 芽

児童心理 Child Study
【特集】前向きな子
昭和22年4月28日第三種郵便物認可
児童心理1月号 定価916円[本体833円]
2017 1
金子書房

クラスをまとめ、子どもを導くための
生きた知恵を身につけよう！

学級経営に活かす

教師のリーダーシップ入門

大前暁政 著

教師にとってのリーダーシップとは何か、
臨機応変にそれぞれの場面に合った
リーダーシップを発揮するには
どうしたらよいか、
理論と具体的な方法の両方を
わかりやすく提示します。

四六判・176頁　本体 1,800円＋税

主な内容

第1章
リーダーシップとはどういうものか?
リーダーシップとは?／リーダーシップの様々な形／リーダーシップは柔軟なもの／影響力という形のリーダーシップ／リーダーとしての重要な資質

第2章
子どもを力強く引っ張っていくためのリーダーシップ
力強いリーダーシップの基本姿勢／ビジョンを伝える／大切なことを本気で語る／活動の意味をつくり出す／背中で導く率先垂範／よい方向への流れをつくる／公平に子どもに接する／断固として行動する

第3章
後ろから支え、自立を促すリーダーシップ
子どものやる気を高める／コーチングを取り入れて子どもの自立を促す／傾聴と承認／やりたい気持ちになるまで辛抱強く待つ／勇気づける／ファシリテーターとしての役割を果たす

第4章
力のある教師のリーダーシップはここが違う
子どものメンターとなる／一人ひとりの子どもとの信頼関係を深めるフォロワーの意志を尊重する／教師としての筋を通す／子どもの生きる気力を高める／自己肯定感を高めてから試行錯誤させる

第5章
反面教師にリーダーシップを学ぶ
自分以外の何かに原因を求める教師／子どもを一人の人間として尊重しない教師／約束を守らない教師／命令が多くリードが少ない教師／尊敬を集められない教師／子どもの立場に立って考えられない教師

〒112-0012 東京都文京区大塚3-3-7　金子書房　☎03(3941)0111(代)　FAX03(3941)0163
URL　http://www.kanekoshobo.co.jp

雑誌 05143－1
Printed in Japan
4910051430175
00848

学級で育てる前向きな心

勉強が苦手な子どもでも積極的に取り組める授業の工夫

愛知県刈谷市立朝日中学校教諭 神谷（かみや） 和宏（かずひろ）

一 やる気を引き出す四つのキーワード

積極的に取り組める授業を工夫するために、最初に子どものやる気を引き出す四つのキーワードを説明する。それは「MUST」「WANT」「CAN」「LIKE」である。

①「やらねばいけない」と思わせる【MUST】

どんな授業でも、ある程度の強制力は必要である。「ノートに書きなさい」「練習問題をしなさい」「隣の人に説明しなさい」など、教師は学習内容や活動内容を指示することは必要である。「どちらでもいいよ」「わかったら考えてね」のような曖昧な指示はあってはいけない。きちんと活動内容を指示することが大切である。

②「やってみたい」と思わせる【WANT】

活動を通して、できるようになったら、どのようなメリットがあるかを意識させることで、「やってみたい」という気持ちを引き出す。さらに、できるようになった際の声かけも大切である。机間指導で「君の気づきは、今まで気づかなかったなあ」とか「この考え方おもしろいから、も

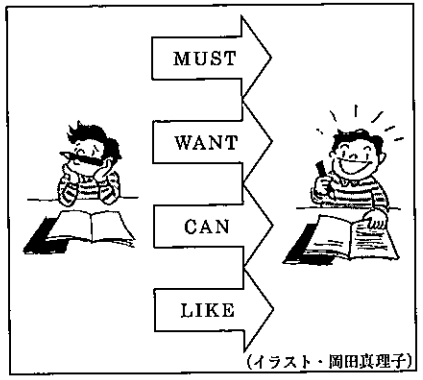

図 やる気の4つのキーワード

っと深めてみて」などのようによい点をこまめに見つけて高めていく。場合によっては、やや大きな声で言葉がけをして、周囲に刺激を与えるのもよいだろう。

③「できる」と思わせる【CAN】

子どもがいくらわかりたい、できるようになりたい、と思っても、見通しがもてなければ意欲は続かない。それには、わかる、できるという見通しをもつことである。すなわちCANを感じさせることである。時折全体像を俯瞰させたり、時にはヒントになるものを与えることも必要である。

④「楽しい」と感じさせる【LIKE】

①～③を繰り返していく中で、学びに対して好き（LIKE）という感覚を抱かせる。子どもは、本来学ぶことや知識が増えることは、「楽しい」はずである。時には、ゲーム、競争、クイズなどをうまく取り入れながら、その意識を顕在化させる。

二　授業をシンプルにする焦点化のスキル

勉強の苦手な子どもの多くは、授業中に何をしているのかわからないことがある。その原因の一つとして、授業がシンプルになっていないことが考えられる。だから、できるだけ授業をシンプルにするように心がけること、すなわち学習のねらいや内容を焦点化することが必要である。

授業の開始時に学習のねらい（課題）を提示することは必要なことである。

例えば、六年理科の「植物のからだのつくりと働き」の授業で「植物のからだの働きを調べよう」というねらいを設定したとする。しかし、これでは子どもたちは何をすればよいのか見通しをもつことができない。そこで、ジャガイモのからだのつくりに焦点化していくつかのモデルを示し、比較・検討することで「水はどこを通って全体に運ばれるのか考えよう」という学習課題を設定する。このように具体的に課題を焦点化すれば、問題意識をもちながら観察していくことができるだろう。

三　見てわかりやすい視覚化のスキル

最近では、視覚化はユニバーサルデザインの分野でも盛んに研究されている。勉強の苦手な子どもには、目で

見てわかりやすいということは、最も重要な要素の一つである。反対に、課題や内容がわかりにくいときには、いくらハッパをかけても、すぐに飽きてしまう。わかりやすくするための具体的な方法としては、次のようなことがあげられる。

・本時の学習目標や課題、発問などをきちんとプリントなどに明記する。
・デジタル教科書や電子黒板などICT機器を活用する。また、思考過程をタブレット端末などで振り返る。
・動きのある教材や実験は、動画にして提示する。
・活動や発表の際に、カラー印刷や色チョークなども工夫する。

また、教材の視覚化と同時に、見せる部分やタイミング、順番などを工夫することも重要である。

四　動きを取り入れた動作化のスキル

動作化とは、文字通り、授業の中に動作を取り入れることである。体を動かす、声を出すなどの活動は、勉強の苦手な子どもに活気を取り戻す。簡単な動作化をいくつか紹介する。

①立たせる

「できた人（わかった人）は立ち上がってください」

ポイントは、簡単でだれもが答えられそうな問題で立たせて意思表示させることである。

②声を出させる

「声を出して読みましょう」

声を出すことによって意識が活性化され、新しい気づきが生まれることがある。

③エア黒板

「必要の『必』って、どんな書き順だったかな？　空中に浮いているエア黒板に書いてみよう」

教師が右手をあげて、一緒に、大きく書くこともできる。手の動き具合から、学級全体の理解の程度を大まかに把握できるとともに、子どもの思考も活性化する。

④隣席説明

「隣の子に説明しましょう」

隣同士で説明し合うことは、学習内容の定着に大きな効果を発揮する。いつも同じペアで取り組むのではなく、時には前後席などペアを変えてみよう。

⑤言語の動作化

「『パッと目覚める』ってどういうこと？　実際にやってみましょう」

文字だけではイメージが湧きにくい言葉や文章がある。そういった場合、実際に動きを取り入れることで、はっきりとしたイメージをもたせることができる。

⑥時間を区切って板書をまとめさせる

「黒板の重要ポイントを一分でノートにまとめましょう」

ただ板書を写させるのではなく、時間を区切って要点をまとめさせる。

五　わかりやすく説明するスキル

「説明」とは説いて明らかにすると書く。すなわち理由や根拠、背景などを、子どもに論理的にわかるように明らかにすることである。説明がはっきりしないと、学習が嫌になったり、飽きてしまったりしてしまう。そこで子どもにわかりやすく説明する方法を紹介する。

①結論を先に述べる

子どもは、まず結論を知りたがる。そこで説明の内容がある程度長くなる場合には「結論を先に話すと……」「〇〇というのは、□□です。というのは……」のように結論を先に述べるようにする。

②初めに説明の構成を伝える

話の構成がわかりやすいと、子どもはあらかじめ聞く準備を整えることができる。「〇〇について、今から三つのことをお話しします。一つ目は……」のような言い方で説明の構成を最初に伝えるようにする。

③根拠を表す言葉を意識的に使う

わかりやすく説明するとは、理由や根拠が明確であるということである。そこで「なぜならば、……」「……という理由だからです」などの言葉を意識的に使う。また、理由や根拠に当たる部分を強調して伝える。

④別の論点に移るときに言葉を挟む

「次に考えなければいけないことは……」「別の問題点として……」などの言葉を挟むことで、話題が変わることを明確にする。このときに、数秒『間』を入れると、さらに効果的である。

⑤句点を意識して説明を区切る

「……けれど……」「……ですが……」のように、接続語を用いてダラダラ話を続けると、説明が不明確になり、時には教師自身が論理を見失ってしまうことさえある。そこで、句点（。）を意識して、話を明快に区切る。

⑥難しいことをやさしく伝える

子どもにはわかりにくい言葉で、無意識のうちにやさしいことを難しく教えてしまってはいないだろうか。まずは、子どもの理解度に合わせて内容をかみ砕き、「難しいことをやさしく伝える」という意識が大切である。

六　基本例題に〇をつけるスキル

算数の学習などでは、「基本例題」→「練習例題」の繰り返しになっている場面が数多くある。勉強が苦手な子どもに、基本例題が十分に理解できていないにもかかわらず、練習問題を強要するのは勉強嫌いを引き起こすだけである。そこで、きちんと例題が理解できているかをチェックする必要がある。

実際には次のように行う。

①基本例題などを行う時に、机間指導しながら、赤鉛筆やボールペンを持って回る。

②クラス全体を一～二分程度で回り、その時に「よくできたね」「いいぞ」「すごい」など称賛の声をかけて回る。万一、間違った考えをしていても、「ここまではいいぞ」「なるほどなあ」などと、できている部分を称賛し、ヒントを与える。ずっとその子どもに深入りして、授業を止めたりはしない。

③万一、できない子どもが多い場合は、個別学習を中断し、一斉学習を行い、できなかった子どもの理解度を確認してから、再度個別学習を行う。

この手法の原点は、愛知教育大学の志水廣氏が提唱されている「〇つけ法」である。この〇をつけながら机間指導する方法は、単純な方法だが、どの子どもも確実に意欲的になる。また、課題解決学習やドリル学習などでも、〇つけ場面を設定すると、一斉授業の中に変化を生み出す。また、一人ひとりに直接かかわることができるので、単に個の理解を見るだけでなく、子どもとのコミュニケーションも図ることもできる。教師からのちょっとした声かけが、子どもにとって実に貴重なものであることが実感できる。

〈参考文献〉
(1) 神谷和宏『アクティブ・ラーニングを動かすコーチング・アプローチ』明治図書出版、二〇一六